涙の木

男１
男２
男３

〇家の前

男１、側溝に横たわっている。溝の隙間から人の出入りを確かめている。

男２、玄関に向かって進む。インターホンを押す。
男３、家の中で寝ている。インターホンに気づかない。手には読みかけの本が、ほとんど落ちそう。
男２、ふたたび、インターホンを。
男３、やはり、寝ている。
男２、いらいらと。そして、携帯を取り出し、男３に連絡をする。

男１、側溝から起き上がり、男３の家の中へ。寝ている男３に近づいていき、男３の耳に息をふっと吹きかける。
男３、驚いて起き上がると、電話が鳴っていることに気づく。

男３　わ。

男３　（耳をさわり）え、ほ？

男３　（電話に出て）はい。
男２　もお。
男３　ん？
男２　何度も鳴らしたんですけど・・・。
男３　え？

男２、インターホンを鳴らす。

男３　ありゃ・・・。

男３、玄関に向かい、ドアをあける。

男３　ありゃ。
男２　・・・。

男３　ゴメン。
男２　・・・。
男３　寝てて。
男２　・・・。

男３　気づかなくて。

男２、うなづく。

男３　ほら、中に。
男２　もお。
男３　ほらほら。
男２　（舌を出し）べー。
男３　へへ。

男２、男３をこづく。

男３　いて。

男３、男２をこづきかえし。

男２　いて。

男３　（男２の肩に手をまわし）ほら。

男３　いらいらせず。

男３、家の中に入れる。

男３　ゴメンよ。
男２　仕事、つかれたっす。
男３　ごくろうさん（頭なでる）。

〇家の中

男２、ソファに座わる。
男３、キッチンへ。

男３　冷たいのにしますか？温かいのにしますか？
男２　さて。

男２　さてさて。

男２　どうしようかな。
男３　冷たいほうでいい？

男２　もおっ！
男３　え？
男２　む？
男３　あら、ご立腹。

男２　あたし、温かいのが、いいなー。
男３　はあ、もういれちゃったよ。

男２　冷たいのじゃなくて、温かいのが、いいなー。
男３　もう、いれちゃったよー。
男２　（ソファにうずくまり隠れて）・・・。
男３　おーい。
男２　・・・。
男３　やっほー。
男２　・・・。

男３　やれやれ。
男２　よしよし。

男３、温かいお茶を持って来て・・・

男３　ほら、召しあがれ。

男２、お茶を飲む。

男３、男２に抱きつこうとして・・・
男２、払いのけ・・・

男２　もおっ。

男３、頭をかき・・・

男３　ごめん、ごめん。
男２　仕事から帰ってきたばかりでね・・・。
男３　うむ。
男２　疲れてるんだわさ、あたくし。

間

男２　体がお目当てで？
男３　いえいえ。

男２　反省した？
男３　うん、そら、もう、反省しきりで。
男２　うむ。よかろう、よかろう（と、手であおぐ)。
男３　むう。

二人、ほほえむ。
男２、男３の肩に頭をもたせかける。

男１、窓の外に立って、部屋の中を見ている。

男３　あれ、ほら、メールした？
男２　いいや。
男３　まだ、してないの？
男２　んー、うん。

男２　なんつーか、うーん、どういうふうに聞けばいいのか分からないっていうか。

男３　や、どういうふうもなにも、お兄さんに行きますってさ。こう、ストレートに（ボクシングのストレートをやる）。
男２　や、そうなんだけど・・・。
男３　ボデーには、こう、ジャブを、こう、ね。そうすると、後から効いてくるから。
男２　ん？
男３　や、や、冗談、冗談。

男２　ほら、今更さ、連絡してもなー、っていうか。
男３　お兄さん、行くのも許してくれないの？

男２　むー、わからん。
男３　わからないならさ、ほれ、ひとまず聞くしかないよ。

男３　ほれ、かっぽれ、かっぽれ。
男２　ん？
男３　ま、そういうこと。

男２　なんつーか、ほらさ、自分から家出ていって、親が心配になったから、帰りますって、通用するさな？
男３　そりゃ、向こう次第だす、よ。
男２　だす？
男３　です、よ。

男２　そうけえ、そうけえ。
男３　だすだす。
男２　だす？
男３　だす。

男３　え、お兄さんのほうは、帰ってこいって言ってくれるんじゃないの？
男２　うむ。
男３　え、そうしたらさ、いつ帰るか伝えて。こう、しれっと、帰りまーすって。
男２　うん・・・。
男３　あ、じゃあ、お疲れっすー。みたいな。
男２　部活。

男３　なんというか、それって、もしかして、むしろ自分の気持ちに納得がいってないんじ

ゃないの？
男２　・・・。

男３　とりあえずさ、お父さんに会っておいた方がよくない？

男３　よくなくない？
男２　よくなくない？え、どっちっすか、よくない？よい？
男３　よくなくなくなくない？

男２　うーむ。
男３　お父さんも、会いたいんじゃないかー。

男２　うー、どうしよー、どうしよー。
男３　あってまえー。
男２　ん？
男３　いってまえー。
男２　ん？

男３　ほら、あれです。ほら、過去のことと現在（いま）のことは違うって、そう思ったらええんです。
男２　うん。
男３　わて、そう思います。

男３　メール。
男２　それな。
男３　それな。

男２　それなー。もーなー。

男２　うん。メールな。
男３　しなされ。
男２　ええ。しよう、しよう。

男２、無言で男３に抱きつく。

男２　（シェイクピアの台詞を発する舞台俳優のように）怒りは束の間。愛情は永遠（とわ）

に残るもの。
男３　（まじめに）うん。（こらえきれず）ははっ。
男２　へへ、もう悲しくて涙するのに、疲れちゃったー。

男３、強く男２を抱きしめる。

男２　これ以上、悲しみに身体を許したくないんだっ。だっ。
男３　うん。
男２　なーんてね。

男２、涙する。
男３、そっと手で、男２の涙をぬぐう。

男３　むかし、むかし、あるところに少年ありけり。
男２　ん？
男３　少年は、涙の木を見つけたのであーる。
男２　あーる。古くない？
男３　え、あ、そう、古い。これは、古い話だから、かまわないのであーる。
男２　まあ、いいさ。つづき、NEXT。
男３　So, anyway, ah…, uh…, so. そう、つまり、涙の木は、涙を流せば流すほど大きくなる木でして・・・。
男２　はあ、なるほど。

男３　しかし、なんということでしょう！
男２　おやおや。
男３　悲しみの涙でいっぱいになったとき、涙の木は枯れてしまうのさ。
男２　ほう。

男３　その涙の木は、青々として、あんなに元気だったのに、涙の量に耐えられなくなって・・・。（泣くふりをして）おいおい、うぇーん、うぇーん。

男３　一方、そのとき、木自身はですよ、徐々にむしばまれていることに気づいていないのであったー。

男３　つまり、この話の教訓はだなぁ。
男２　だな？

男３　だなー。ぼかぁね、まじめに、しゃべってるんですよ。
男２　はい。
男３　この教訓は、涙は木を枯らさない程度に、ほどほどに。ってこってす。
男２　ありゃ、でも、いつかは枯れてしまうんでしょう。
男３　うん。つまり、どう生きるかが、問題な、のさ。
男２　な、のさ。のさの前に間があった。
男３　なのさ。
男２　で、どういう話だっけ？
男３　なのさーーー。のさーー（と、襲いかかるふり）。
男２　はい、はい。

間

男３　あ、そういえば、来週、東京に行かなくちゃ。いかなーくちゃ。きみにーあいに・・・
男２　（遮るように）出張？
男３　うん。

男３　どれだけ復興が進んだか、まとめなくちゃ・・・。
男２　東京の人々に伝えるの？
男３　東京の人らに。
男２　お口が悪いですよ
男３　うん。東京のお偉方によぉ、伝えるんでぃ。

男３　いやだなー。

男２、ほほえむ。

男３　報告、報告、ホウ、レン、ソウ。

男３　東京、行きたくない。

男２　休めない？
男３　うーん。

男３　休みたい・・・。つーか、やめてぇ。

男２、男３の頭をぽんぽんする。

男３　東京の人間が、福島に来て、のぞいたものを持ち帰って、報告するの、それ、いやだ・・・。私有地でキノコ、盗んでるみたいじゃない？
男２　・・・。
男３　学校的というか、告げ口してるみたいで・・・。つまりですね、パノプティコン的な、ですね・・・。
男２　おお、インテリー。ひゅーひゅー。

男３、咳払いをする。

男３　文章つくってさ・・・。

男３　写真とってさ・・・。

男３　なんつーか、馬鹿馬鹿しい！

男３　そうじゃない？
男２　ん？

男２、笑う。

男３　行きたくないなー。

男２　じゃあさ、どうよ、ほれ、私たちの写真をとらまいか？うんとふざけたやつ。

男２　おまぬけ写真を報告書につけて。
男３　おまぬけくださーい。
男２　はーい。おまぬけしましょー。

男３　役人たち、びっくりするだろうね。

男２、変顔して、自撮りする。

男２　ほら、これなんてどう？

男３　ええで、ええで。

男２　ほれ。

と、男２、男３の写真を撮ろうとする。
男１、見切れを気にして、ずれる。

男３も変顔して・・・。

男２、撮った写真を男３に見せる。
二人、笑う。

そして、ふたたび肩を組む。

男２　疲れちゃった・・・。

男３、写真をながめている。

男２　寝てよい？
男３　うむ。よいよ。
男２　ふふ。

と、男２、少しづつ、まぶたが重たくなってくる。

男３　寝たかな？
男２　起きてるよ。

男３　実はさぁ、涙の木の話には続きがあって・・・。
男２　んん・・・。

男３　家の庭で、涙の木を育てていた男の子がいました。しかし、残念なことに、その男の子は、不慮の事故で亡くなってしまったのです・・・。

男３　彼の両親は一生分の涙を流しました。
男２　一升瓶。
男３　いっしょうぶん！

男３　すると、木は急に伸びて、家を覆ってしまいました。

男３　木のかげに、二人は驚いてしまって、涙を流すのを止めてしまったのです。

男２　んん。

男３　そして、二人は気づいたのです。息子をなくしたことを少しの間、忘れていたことを。

男３　二人は、顔を見合わせ、愛していた息子のことを、どちらも忘れていたことを確かめて、また少し傷ついた、とさ・・・。

男３　とさ。

男２、完全に眠りに落ちている。
窓の外から、男１、二人をながめている。そして、そっと涙をぬぐう。